

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：辻村 尚子 作成日：2025年1月6日

1. 教育の責任

大手前大学の「生涯にわたる、人生のための学び」という建学の精神に基づき、「自ら学ぶ力」「他者と協働する力」を養う教育の実践を目指している。

「キャリアデザインⅠ・Ⅱ」（春・秋学期、各2単位、15名）

「ゼミナールⅠ・Ⅱ」（春・秋学期 各2単位、13名）

「卒業研究」（通年、4単位、22名）

「日本文学入門」（教職課程必修科目〈中高国語〉、春学期、2単位、217名）

「世界の中の日本文学」（春学期、2単位、16名）

「日本文学演習」（春学期、2単位、32名）

「日本の名作を読む」（教職課程必修科目〈中高国語〉、秋学期、2単位、242名）

「日本人の心とことば」（春学期、2単位、112名）

「書道文化」（秋学期、2単位、28名）

「日本文化・阪神文化」（春学期・秋学期 オムニバス授業、2単位、春149名・秋178名）

「日本文化・アジア文化研究」（秋学期 オムニバス授業、2単位、37名）

「博物館実習」（博物館課程必修科目、通年、3単位、10名）

「日本近代文学特殊研究」（大学院科目、秋学期、2単位、4名）

「比較文化特別研究Ⅰ」（大学院科目、修士課程研究指導、通年、4単位、1名）

「比較文化特別研究」（大学院科目、博士課程研究指導、通年、4単位、1名）

2. 教育の理念

過去の文物を通して、変化する現代社会を生きる人間力を養うことを目標としている。昨今「古典文学は必要か？」という問いをしばしば耳にするが、時代も言葉も異なる文学や歴史資料という過去の文物を、作者の生きた時代や社会状況などの背景も含めて理解しようと努め、学び得たことを言語化し、共有する行為は、まさに、国際社会を生きる上で必要な「他者理解力」と「自己表現力」を養うことに他ならない。対象を正しく理解するための基礎知識を身につけ、多様な価値観が存在することを知り、学び得たことを言語化して他者と共有する一連の学修プロセスのなかで、学生自身が気づきや喜びを得ることができる授業を目指したい。

3. 教育の方法

日本文学系の授業では、主に古典から近現代文学を取り扱う。学生の多くは、古典文学に対し、中高での単語・文法の暗記教育による苦手意識を持っている。また、近現代文学であっても、文学における言語表現は、読書経験の少ない学生にとって、馴染みの薄いもの・難しいものと認識されがちである。現代作家による現代語訳や、漫画・アニメ化された作品、映像等も活用し、まずは内容の面白さを味わってもらえるよう工夫している。また、中高の教科書で学んだ作品を、改めて深く読解することで、学生自身が大学でのより専門的な学びを実感することを目指している。作品読解において、鍵となる部分は原文そのものの表現の分析を行い、文学作品にアプローチするための基礎的な方法を提示する。合わせて、自らの意思・思考を正確に言語化する力を養うことも目指している。授業内には、文学作品を通して自己のあり方を内省する契機となる問いかけを積極的にを行い、過去を通して現代を学ぶことを学生自身が実感できるよう心がけている。毎回、数人の学生のコメントを「フィードバック」として紹介し、様々な考えがあることを知り、自己認識を深める機会としている。また、授業によってはくずし字の学修も積極的に行っている。わずか15回の授業であるが、毎回の地道な継続学修により、飛躍的に読解力を伸ばしており、学生の学修意欲の向上につながっている。

博物館実習の授業は、実技実習・見学実習・館園実習の三つが主となる。デジタル技術の進歩により、博物館をめぐる状況も目まぐるしく変化している。時々刻々の変化にも対応できるよう、オンライン展示等新しいトピックも取り上げ、実践的な学修を心がけている。

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：辻村 尚子 作成日：2025年1月6日

掛軸・卷子・屏風・陶磁器等、実物資料を用いた実技実習では、個別指導を行い、受講者全員が確実に技能を習得できるよう努めている。また、学芸員の仕事は、展覧会開催に伴う事務や広報物のデザイン、関連講座でのレクチャー等、多岐にわたる。授業では学芸員としての礼儀・コミュニケーション力の養成を図るため、企画プレゼンテーションを始めとする各種発表・討議や、学生主体による企画展の開催を行い、社会人として通用する力を身につけることができるよう、指導を心がけている。

4. 教育の成果

講義系科目では、授業をきっかけとして学生の興味・関心の幅が広がり、授業で紹介した本を自主的に読んだ、関連する展覧会を観覧した、といった報告を受けている。

演習系科目は、とりわけ学生自身が達成感を感じる度合いが高い。指導する側から見ても、各分野の実践的な方法・技術を習得し、学生が成長していることを感じる。博物館実習では10名全員が学芸員資格を取得することができた。

5. 改善への努力と今後の目標

「世界の中の日本文学」は今年度新規開講の科目である。既存の「日本文学入門」「日本の名作を読む」は古典文学作品を主とするものであった。本科目では、明治～平成時代の近現代文学を扱い、既存科目とあわせて現代までの日本文学の流れをたどることが可能になった。作品の選択にあたっては、国語教員を志望する学生の受講を期し、教科書に登場する代表的作家・作品を扱うこと、国際日本学部の科目であることを考慮し、世界人としての一人の人間のありかたを考えるきっかけとなる作品を扱うこと、を意識した。既存2科目がオンデマンド配信であるのに対し、本科目は対面形式である。対面授業であることを活かし、3回の「ブックワーク」の回を設定した。授業で扱った作品のなかから、心に残った1文に対して紹介文を作成する「1文作文」の発表・共有と、文学研究の初歩的方法（作品分析・資料調査）を実践的に学ぶワークを実施した。わずか3回であったが、回を重ねるごとに、文章表現力・伝達力がアップしている様子が見受けられた。卒業研究において、基礎知識の薄さから、問題設定に苦戦する学生が多い。2年次を対象とする本科目で、卒業研究の足掛かりとなる知識と方法を学ぶことができれば、と考えている。本科目の受講者のなかに、3年次における日本文学ゼミナールを選択する学生が多かった。今後のゼミ指導の様子を見ながら、授業を改善してゆきたい。

【添付資料】

「世界の中の日本文学」シラバス